

私の戦争体験

早川元雅

私は昭和6年生まれなので徴兵で戦地に行くことはありませんでしたが、内地にいても戦地と同じように死ぬか生きるかの恐ろしい体験はしました。すなわち昭和20年5月労働員先の旧県営グラウンドで松の根堀をしている時に、硫黄島飛来のP-51が超低空で飛来し、4機編隊でわれわれを狙って、風防をあけてわれわれを見ながら紅毛碧眼のパイロットが、笑いながらゲーム感覚でわれわれ少年に機関砲で射撃してきたのです。その時はこれでもう人生も終わりかと思いました。すぐそばの杉の木に弾が命中して木端が吹き飛びました。それでも私には当たらず助かりました。

次は6月10日のボーイングB-29による爆弾投下でしたが、すこし離れていたのが被害はなく、恐ろしい目にもあいませんでした。

次いで7月7日の所謂七夕空襲で、この時は猛火と煙に追われて命からがら逃げまくって命はとりとめました。その時のことを少し詳しく述べてみたいと思います。7月6日の夜空襲警報が発令されましたが、当初は甲府が爆撃されているということです。こし胸をなでおろしていたのですが、午前2時ごろになって千葉市の空襲がはじまったのです。

防空壕の中で息をひそめていましたが、焼夷弾が近くに落とされはじめ逃げないとあぶないと東京で経験のある同居人の人から言われて逃げにかかった時でした。我が家に焼夷弾が落下したのです。“ヒュウ”“ドカン”ともものすごい音がして焼夷弾が屋根をつらぬいて落ちてきました。私は年老いた母の手を引いて外へ出ましたが、外はもう火の海でした。風上に逃げるはずがとても無理で、火の粉と煙に追われてどんどんにげました。途中がらという音、ひゅうという音に身をふせたり手拭に防火用水の水をひたして口をおおってひたすら走りました。苦しくて走るのをやめようと思いましたが、そうすると焼け死んでしまいます。一生懸命走って、最後は千葉中（今の千葉高）の相撲場の脇の横穴で夜を過ごしました。夜が明けて家の所まで来てみましたが、一面の焼け野原で残り火がちょろちょろしているほかは焼け残りの棒杭や焼け焦げて真っ黒になった焼死体がごろごろ、大人も縮んで子どものようでした。本町国民学校の地下道でも大勢の人が焼け死んだようです。私は焼け跡に立って、これからは住む家もなく、食べ物もなくどうしたら良いか茫然自失の状態で立ちすくむしかありませんでした。とても恐ろしい体験でした。生き地獄とはこのことでしょうか。当時の悲惨な状況を十分に描写できませんが、戦争とはいかに悲惨で一般国民を苦しめたかを申し述べました。